

聖書日課 『からし種』 2022.9.18-9.25

<p>9月18日 (日) 出エジプト 6章</p>	<p>「そして、わたしはあなたたちをわたしの民とし、わたしはあなたたちの神となる」(7節)。神がどんなときにも私たちが「ご自分の民」とする決断が先にある、私たちは「神さま！」と呼ぶ信仰をいただいていく。苦難の旅の中で私たちが不信仰にも神を足蹴にする時にも、神は私たちが「我が民よ！」と呼びかけ続けてくださる。その恵みに応えていきたい。</p>
<p>19日 (月) 出エジプト 7章</p>	<p>「モーセとアロンは、主が命じられたとおりに行った。ファラオに語ったとき、モーセは八十歳、アロンは八十三歳であった」(6-7節)。現代の日本では「後期高齢者」と呼ばれる世代の二人を主は用いたもう。モーセだけでも、アロンだけでもなく、互いに互いを必要とする二人によって「出エジプト」という主の業が導かれていく。主の業に年齢制限はない。</p>
<p>20日 (火) 出エジプト 8章</p>	<p>「魔術師はファラオに、『これは神の指の働きでございます』と言ったが、ファラオの心はかたくなになり、彼らの言うことを聞かなかった」(15節)。ファラオは助言を聞き入れず、自分のやりたいようにしかやらない。「神の子」と称されるファラオが、自分の知らない「神の指」を認めるわけにはいかないからである。しかし、真の神だけがこの人間の高ぶりを砕かれる。</p>
<p>21日 (水) 出エジプト 9章</p>	<p>「しかし、あなたもあなたの家臣も、まだ主なる神を畏れるに至っていないことを、わたしは知っています」(30節)。私たちには「神を畏れる信仰」が今日、その心の片隅にでも芽生えているだろうか。神から見たら「ああ、お前はまだ神を畏れるにいたってないなあ」と言われているのではないか。「子らよ、わたしに聞き従え。主を畏れることを教えよう」(詩編 34:12)。</p>

聖書日課 『からし種』 2022.9.18-9.25

<p>22日 (木)</p> <p>出エジプト 10章</p>	<p>「イスラエルの人々が住んでいる所にはどこでも光があった」(23節)。エジプト全土が暗闇に覆われる中、不思議にもイスラエルの人々は光に照らされていた。その光はどのような光だったのだろうか。聖書の御言葉を開くところに輝き出す光ではなかったか。今日、私たちの心にも主からの光が届けられ、暗闇の覆う世界に主イエスの働きを見出すことができるように。</p>
<p>23日 (金)</p> <p>出エジプト 11章</p>	<p>「主はこの民にエジプト人の好意を得させるようにされた」(3節)。モーセとアロンが示す神の業に対してファラオが心を頑なにする一方で、エジプト庶民はイスラエルの人々への好意を増していった。権力にしがみついたファラオが認めることのできない神の業に、力をもたぬ庶民の方が心を開かれていたということか。今日、素直に神の業を認めることができるように。</p>
<p>24日 (土)</p> <p>出エジプト 12章</p>	<p>「その夜、主は、彼らをエジプトの国から導き出すために寝ずの番をされた。それゆえ、イスラエルの人々は代々にわたって、この夜、主のために寝ずの番をするのである」(42節)。主が寝ずの番をして暗闇の中イスラエルを守ってくださった。誰にも理解してもらえない暗闇の時にも「まどろむことなく」(詩編 121:4)、私たちを覚えてくださる主の慈しみに感謝。</p>
<p>25日 (日)</p> <p>出エジプト 13章</p>	<p>「主は彼らに先立って進み、昼は雲の柱をもって導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた」(21節)。荒れ野の旅はその最初から「雲の柱」に導かれ「火の柱」に照らされて始まった。「わたしは主にあって彼らに力を与える。彼らは御名において歩き続ける」(ゼカリヤ 10:12)。今日歩く力を礼拝からいただいとう。</p>